

- 20) *Tr.* III-2-14.  
 21) *Tr.* III-3-10.  
 22) *Tr.* III-3-12.
- a) ca. 949-1022. 神を光として体験する特異な神秘家。神学者という呼称をもつナジアンゾスのグレゴリオスと区別するため「新神学者」と言われる。  
 b) †1340. アトスの修道者。パラマスの師とも言われる。  
 c) マカリオス (ca. 300-ca.390) はエジプトの修道者。彼に帰せられる霊的講話を偽マカリオス文書と言う。  
 d) ca. 570-649. シナイの修道院長。その著『天国の梯子』は修道者によく読まれた。  
 e) ca. 1290-1350. カラブリア出身の修道者。パラマスとの論戦に破れ、後イタリアに戻り、カトリックに改宗。ペトラルカにギリシア語を教授した。  
 f) ca. 1296-1359. アトス山で修行した後、テサロニケの主教となる。神のうちにウーシアとエネルゲイアを区別した。  
 g) カルケドン信条を守る、反単性論の神学者。

## 意見

## 野の百合とロゴス

宮本 久雄

野に百合小花が風にうたっている。重い荷を担って農夫が運命の違いを思うかのよりに傍を通りすぎる。女の子が花をつみとる。旅の宗教詩人がそこに生命の開花を見る。たまたま哲学・神学者が小花に驚異をおぼえる (thaumazein)。この百合との関わり方も人様々である。我々は特に2つの関わり方を考察してみたい。①1つは聖フランシスコのような宗教詩人の関わりであり、②次は哲学、神学者の関わり方である。前者(以下①と記す)はまず小花と哲学的対話をなそうとはすまい。むしろ我と汝・小花が共にそこに生かされている根源的場から、小花とのある生命的共鳴を直観し、それを他の人に絵や詩や仕草にしてみせるか、沈黙の感謝の中に秘してしまうかもしれない。ところで後者(以下②と記す)は、ロゴスによって世界を披く者である以上、

①者のような直観や表現に留まることはできまい。どうしても学（哲学、神学の学であって、自然科学の学ではない）的ロゴスによって小花との関わり方を思索・表現しなければならない。しかし、百合と②との間には、人間の用いる記号・ロゴスは存在しない。つまりロゴ斯的に交流しうる手段・共通文法は決して存在しない。だから②として小花と対話することをあきらめ、①や農夫や少女のように関わるしか方策はないのであろうか。その意味では、哲学的対話法によって哲学の祖とされるソクラテスは、小花と対話し学ぶことを断念している。彼は『パイドロス』の中でその消息を次のように語る。「僕は、ものを学びたくてたまらぬ男なのだ。ところが、土地や樹木は僕に何も教えてくれようとしませんが、町の人たちは何かを教えてくれる」（229D）と。ここに哲学的思索が、人間の用いる言語の文法内を動くことに成った端初が見られないだろうか。この線を押し進めれば、言語が決定し語る世界以外の現実については黙する外ないというテーゼが帰結しうるであろう（Wittgenstein）。だから絶・対者たる神を思索したギリシア教父は「言語の限界に逆って進」んだ勇敢無謀な者とみなされよう（Wittgenstein『倫理学講話』）。実際に、絶・対者に面して②の仕方に関わろうとすると、先の百合に面して関わろうとする以上の絶望が生じてくる。それは不可知論以前の絶望である。①の人々は、絶・対者を生命的根源と直観して「太陽の賛歌」を献げるかもしれない。②は小花と対話しえないように真接絶・対者と対話もできず、彼に関して思索も何もできない。だからといってソクラテスのように人間（じんかん）に対話法をおけば、人間が絶・対者顕現の場にそのまま移行するとは思わないだろう。絶・対は生活形式をも絶するからである。しかも②にとって絶・対者に学が成立しない理由がさらに付加される。なぜなら絶・対者に命題が成立しないからである。①の人なら感嘆詞を発してこの困難を切り抜けるかもしれない。②の人は①の直観を直観しえてもそこに留まらず、絶・対者の命題表現を探究する。しかし命題は述語による主語の対象化限定であるので、絶・対者は人間の既成の命題、説明の体系を拒み、そういう学者の接近方式を崩壊さすわけである。百合の花に面し学ぼうとしたとき、ソクラテスは市井に戻らなければならなかった。②の人は絶・対者に面して拒まれたとき、どこに戻ればよいのであろうか。彼は出来れば①の人のように、ある仕草をし感嘆し詩に身を託したいであろう。あるいはある生活形式の言語世界に生き、絶・対者に対してひたすら沈黙をまもりたいであろう。あるいは絶・対者を宿し止揚された人間的言語という宗教的教典を求める旅立ちへか。ギリシア教父は絶・

対者との間に文法なく、彼は却って人間の学の命題を崩壊さす者たることを覚ったとき、ガリラヤの野の百合に天父を語った人を見出した。その人の言はそのまま学ではなかったが、教父は野の百合とロゴスの関わりをそこに見出し、神学として今日の我々に遺している。それは我々への愛しき遺産であり、しかし文法なく命題をこぼつ者に向かおうとする我々にとって十字架ともなっている。

## 意見

加藤 武

このたびのシンポジウムは主題が〈中世における神秘思想——教父とその遺産〉という興味深いものであり、しかも谷、熊田、大森教授のいずれも高度に専門的なご研究をふまえて、しかも共通のものをさぐる、という知的冒険にいどまれる素晴らしいものであった。筆者はこの領域に不案内であるが、副題に免じて、意見を述べご教示をたまわりたい。

質疑応答がすすむうちに、宮本教授から、壇上に活けられた百合の花をさして、三人の提題者にむけて共通の質問が出された。それはこの花を見て、どのように神秘への道筋を開かれるか、を問うものであった。まさに共通のものを、共有しつつ、対話をおこなう場を設定する意図からの優れた問題提起であったと思われる。これにたいしてなされたお三人の回答はそれぞれに興味深くあったが、とりわけて、熊田教授は、言下にいいはなったのである。「わたしにとりこの花は神様です。わたしもこの花を見ることから、またそのうちに、神秘を経験します」と。このとき百合の花が、はじらい、いささか、くれないに染まらなかったか、それは知らない。筆者にはこの問題提起はきわめて興味深いものであったけれど、同時に二つの疑問が生じた。

問い 1 神秘経験の出発点はどこか。

2 神秘経験を研究する研究者はどこに位置するのか。

1について、とくに熊田教授がたんに『神名論』の否定神学にとどまらない領域が、